名古屋ＳＦ読書会０４ゼンデギ2016・01・23

作者・作品紹介

　グレッグ・イーガンは1961年オーストラリア生まれ。西オーストラリア大学で数学理学士号を取得。1983年に短篇 Artifact でデビュー。コンピュータ・プログラマとして勤務した後、90年代中ごろに専業作家になる。90年から92年にかけて〈インターゾーン〉と〈アジモフス〉誌に多くの短篇（「貸金庫」「ぼくになることを」など）を書いて注目される。その後、長篇に軸足を移し、『宇宙消失』『順列都市』『万物理論』『ディアスポラ』と発表する度に高い評価を得た。2000年代前半、政治運動に参加して小説から離れていた時期もあったが、近年再び小説に戻り、『白熱光』『クロックワーク・ロケット』に始まる三部作などを続々と刊行している。テーマとしては、人間の認識や意識とは何かという問題を科学的アプローチによって扱うことが多い。

「科学が明らかにする事実の中には、常識的・日常的な感覚や知識と反していたり、生理的・感情的に嫌悪感をもよおさせるものがあったりもするが、それでもそれは事実なのだ、という認識。論理性や合理性を尊重するこの態度は、人間を分類したり、ましてや差別したりすることへの拒絶にもつながる。迷信やニセ科学、宗教に対する批判もこのスタンスから発しているのはいうまでもない。」（山岸真『ＴＡＰ』解説より）。少年時代ニーヴンとヴォネガットを愛読していたということからも、イーガンの立ち位置がどの辺りにあるかはうかがえるだろう。

「ある特定の個人とそっくりの人工現実が出現したとき、私たちにとってその個人と人工現実を区別しなければならない理由はあるのか。あらかじめ決められた未来の中を生きる人間に自由は存在するのか。性格や信条、感情が脳内の化学物質によって規定されてしまうのなら、自分のアイデンティティはどこにあるのか――。彼は自己について興味があるのだ。」（瀬名秀明『祈りの海』解説より）。この指摘は、限定的な人工知能を作り出す話である『ゼンデギ』においても、見事に当てはまる。

　病に侵された父親が息子のために自分を仮想現実として残そうとするという本書の物語は、極めてドラマ性が高く、またイーガンにしては珍しく自伝的要素が挿入されているため、感情移入しやすく（１部さえ乗り越えれば）読みやすい作品となっている。散りばめられた楽曲にも意味があるものもあり、それを読み解いていくのも面白い。以下はその一つの例である。

参考資料「なぜマーティンは仮想自己をジャックと名づけたか？」　　by　渡辺睦夫

P.19「ポール・ケリーの曲を聴きたくなったが、最初の曲を何にするか自分では決められなくて、ソフトウェアに選択をまかせた。「フロム・セント・キルダ・トゥ・キングズ・クロス」がヘッドホンいっぱいに広がる。マーティンは目を閉じてシートにもたれ、ノスタルジーに浸って微笑んだ。次の曲は「トゥー・ハー・ドアー」、別れと和解の歌だ。マーティンは微笑みを絶やさず、力強く平易な歌詞に意識を集中し、自分自身の人生と似たところがあるとは認めまいとした。」

ポール・ケリー

　オーストラリアの SSW。ボブ・ディランやキンクスをヒーローということからわかるように、シンプルで柔軟な演奏、哀愁を漂わせたメロディーに特徴がある。81 年のデビュー以降 20 枚近くアルバムを発表。『ゴシップ』（87）『アンダー・ザ・サン』（88）『ソー・マッチ・ウォーター・ソー・クロース・トゥ・ホーム』（89）は日本でも発売された。最新作は元クラウデッド・ハウスのニール・フィンと組んだ『Goin’ Your Way』（2015）。

「トゥー・ハー・ドア」
２人は若くして結ばれ、金はなかった
奴は一時解雇され、生活はどん底になった
奴は酒におぼれ、ケンカが絶え間なくなった
奴は荒れる一方で、妻は子供達を抱き寄せて言った
「アンタが命を縮めていくのを見てるのはいやよ
だからアタシは出ていくわ」
「どいてよジャック、そのドアを出ていくんだから」
彼女は兄を頼って行き、バーで働いた
奴は食糧倉庫で１年働いた　そして奴は手紙を書いた　君に会いたいと
少しは改心したと思い、彼女は旅費を送った
奴はどしゃ降りの中を　　彼女の家までやって来た
それは日曜日だった　奴は節々が痛んだ
袋叩きにあった男のようにゆっくりと入って来た
２人に将来はあったのか？　　奴は子供達を見分けられたのだろうか？
１枚の写真に収まり、家庭を立て直せただろうか？
奴は座席で揺られながら通りをやってきた
銀屋根の車に乗って……　（アルバム『アンダー・ザ・サン』1988　より／訳 Kuni Takeuchi）

イーガン邦訳単行本リスト＆不完全レビュー

by 渡辺英樹

『宇宙消失』Quarantine(1992)

（1999 年 8 月 27 日発行／山岸真訳／創元ＳＦ文庫）
★《ＳＦが読みたい！》ベストＳＦ海外１位

90 年代を通じて通好みの力作短編を精力的に発表し、本誌においてもＳＦマガジン読者賞を二度受賞するなどして評価の高いグレッグ・イーガンの処女長編『宇宙消失』は、量子力学理論を軸にして〈バブル〉と呼ばれる暗黒の球体に閉じ込められた人類の運命を描き出してみせた、気宇壮大な作品である。ＳＦならではの仮説の面白さ、ベイリーやワトソンを思わせる奇想が炸裂し、間違いなく本年度のベストに挙げられる傑作に仕上がっている。

2034 年 11 月、空から星が消えた。太陽を中心とした半径 120 億キロの完璧な球形をした〈バブル〉が、突如として出現したのである。誰が何の目的で作ったのか皆目見当がつかないまま 30 年以上の時が過ぎ、2067 年のある日、元警官のニックは、重度の先天性脳損傷患者ローラ・アンドルーズの行方を探してほしいという依頼を受ける。自力では動けないはずのローラがロックされた病室から抜け出してしまったのだ。調査を続けて新香港にやって来たニックは、潜入した生化学研究所で逆に捕えられ……。

北オーストラリアの半島に人工的に作られた多国籍街である新香港の猥雑な空気、脳神経を再結線して脳自体にデコード機能を持たせるという秀逸なアイディア、テロリストに妻を殺された過去を持つニックのシニカルなキャラクターなどが組み合わさって、初めのうちは近未来ハードボイルド的な展開を示す本書だが、本題である量子力学が登場する辺りから、どんどん話が広がっていき、結末近く、天国と地獄に象徴されるめくるめくヴィジョンに到達する頃には、人類の行く末を描く本格ＳＦの様相を呈することとなる。精巧な積み木細工のように、細かな描写を丹念に積み重ねているので、読者は飛躍を意識することなく、量子力学の観測問題から〈バブル〉出現の秘密に至るまでの緻密な論理の流れを堪能することが出来るだろう。アイディアの巧みさをじっくりと読み味わってほしい濃密な作品である。（〈ＳＦマガジン〉1999 年 11 月号）

『順列都市（上・下）』Permutation City(1994)

（1999 年 10 月 31 日発行／山岸真訳／ハヤカワ文庫ＳＦ）
★《ＳＦが読みたい！》ベストＳＦ海外３位

先月の『宇宙消失』に引き続き出版されたグレッグ・イーガンの『順列都市』は、量子力学を軸として無数のオルターナティヴ・ワールドを描いた前作と同様に、今回は人工生命理論を軸として現実世界とは異なる架空の宇宙を描き出してみせた力作である。

2045 年、一部の裕福な人々は自らの肉体を高解像度スキャンにかけ〈コピー〉と呼ばれる存在として仮想空間に生き続けることが可能となった。主人公ポール・ダラムは自らの肉体をスキャンし〈コピー〉を作成して仮想空間で暮らす実験を繰り返しているうちに、ある画期的な理論を思いつく。五年後、ダラムは行動を開始した。〈コピー〉として存在する富豪たちに、破格の安値で永遠の不死を提供しようと申し出たのだ。一方で、ダラムは、単なる仮想空間とは異なるオートヴァース（独自の物理法則に従うコンピュータ・モデル）においてバクテリアの自然淘汰に初めて成功したマリアに接触し、オートヴァース内で進化していく一つの有機体を設計してほしいと依頼する。ダラムが作ろうとしているのは、仮想空間ともオートヴァースとも異なる、ＴＶＣ宇宙と呼ばれるセル・オートマトンであり、その中心には順列都市と呼ばれる首都があるという。果たしてダラムの計画は成功するのか。

イーガン作品の特色として、オリジナルとコピーを比較してその差異を無効化し、真のオリジナリティとは、現実とは何かと問いかけること（「ぼくになるために」「真心」など）が挙げられるが、本書では、肉体をスキャンして作られた〈コピー〉とオリジナルとの対立、仮想空間やＴＶＣ宇宙と現実世界との比較を通じて、揺るぎ無い大樹のごとく安定しているはずの現実が思いっきり揺さぶられることになる。さらに物語の後半、オートヴァースで独自の進化を遂げた人工生命体ランバート人と〈コピー〉たちとが初めて接触する場面においては、ＳＦ史上初ではないかとさえ思われる仮想エイリアンと仮想人類とのファーストコンタクトが繰り広げられ、圧巻だ。科学の最前線を踏まえた上で想像力の限りを尽くしたイーガンの発想の緻密さと大胆さ、そして思索の深さに、我々読者は圧倒され、翻弄されるばかりである。

厚さ 200 ミクロン幅数百メートルから成る異星生命体〈絨毯〉とのファーストコンタクトを描いた傑作中編「ワンの絨毯」や本書などを読んでいると、先月号で山岸真氏も述べていたように、イーガンの作家的な資質はベイリーやワトソンよりもレムに近いような気がしてくる。意識とは何か、現実とは何かと問い掛け、想像できないものを想像しようとする真摯な姿勢がレムに共通しているのだ。しかし、その一方で、本書の塵理論に見られるような突拍子もない理論を、精密な実験の描写によって強引に納得させていく、技術的なハードＳＦ作家としての側面もイーガンは備えている。小説の技巧的な面から見ても、本書では、孤独なダラムと母性的なマリア、アウトローとしてのピーとケイト、殺人者としての罪の意識に苦しむリーマンなど、複数の視点から物語を分割しそれぞれのキャラクターに文学的な深みを持たせることに見事に成功しているし、マイケル・ナイマン、ヴェンダーズ（『ベルリン・天使の詩』）などの現代音楽や映画をさりげなく取り入れるコラージュ・アーティスト的な側面もある。とにかくこのイーガンという作家、一筋縄ではいかない奥行きの深さを持っているようだ。絶対に読んで損なしの本書は、『宇宙消失』と合わせて今年度最大の収穫であり、読者にイーガンという作家を強烈に印象づける傑作であることは間違いないだろう。（〈ＳＦマガジン〉1999 年 12 月号）

『祈りの海』Oceanic and Other Stories(2000)

（2000 年 12 月 31 日発行／山岸真編・訳／ハヤカワ文庫ＳＦ）
★《ＳＦが読みたい！》ベストＳＦ海外１位

グレッグ・イーガンの『祈りの海』は、現代ＳＦの可能性を切り開いて見せてくれている、画期的な作品集である。「ＳＦの未来がここにある」という帯の惹句は決して大げさではない。本書は「貸金庫」（本誌 93 年 8 月号）から一貫してすべてのイーガン作品を翻訳してきた山岸真氏の確かなセレクションによる日本オリジナル短編集であり、ＳＦというジャンルが 21 世紀を迎えた現代でもなおスリリングな衝撃を人々に与え得ることを示す最良のショウケースとなっている。

最新の科学的知見を作品に取り入れながらも、人間の思考や感情はいっこうに旧来のまま、繰り広げられるドラマはどこかで見たり聞いたりしたものばかりというＳＦが多い中、イーガンの作品には必ず「変化」があり「驚き」がある。テクノロジーの発達に伴う認識の変革を描くことがＳＦの中核であるとするならば、イーガンはまさしくＳＦの王道を歩んでいるのだ。いささか「自分」という存在にこだわり過ぎるきらいはあるけれど、認識の変革がまずは個人的に経験されるしかないものだと考えればそれも当然だろう。

本書に収められた 11 編を読み進めると、イーガンの題材の幅広さ、最先端科学に対する目配りの良さに感嘆せざるを得ない。毎朝目覚めると別の人物になっている主人公が真の自分を発見する「貸金庫」から始まって、遺伝子操作によって創り出された人間の子供に似た生物の悲劇を描いた「キューティ」、脳の中に埋め込まれたニューロコンピュータ〈宝石〉が人間の脳と入れ替わる「ぼくになることを」など、アイディア重視の初期短編における騙りの巧さも見逃せない。さらに、時間逆転銀河の発見により未来の自分からのメッセージを読むことが可能になる「百光年ダイアリー」や、ドラッグによって世界移転能力を手にしたドリーマーが作り出す〈渦〉を描いた「無限の暗殺者」などに顕著な、論理のアクロバットとでも呼ぶべき超絶のアイディア展開。とりわけ前者の時間逆転理論には『順列都市』の塵理論に匹敵するイーガン流マジック・リアリズムが遺憾なく発揮されている。そして、近年のヒューマニスティックな感動を与える作品、ウガンダで接触伝染病イェユーカの治療に当たる医師の決断を描いた「イェユーカ」や、幼い頃の宗教的な体験を心の支えとして生きてきた主人公の内面を描いてヒューゴー賞受賞に輝く「祈りの海」に至るまで、本当に粒揃いの傑作ばかりが並んでいる。あえてベスト３を挙げれば、アイディアの面白さで「貸金庫」、論理の凄まじさで「百光年ダイアリー」、描写のきめ細かさと感動の深さで「祈りの海」といったところだろうか。ともかく必読。早くも来年度ベスト候補作の登場である。（〈ＳＦマガジン〉2001 年 3 月号）

『しあわせの理由』Reason to Be Cheerful and Other Stories(2003)

（2003 年 7 月 31 日発行／山岸真編・訳／ハヤカワ文庫ＳＦ）
★日本オリジナル短篇集第二弾。ベストＳＦ海外２位

『万物理論』Distress(1995)

（2004 年 10 月 29 日発行／山岸真訳／創元ＳＦ文庫）
★ベストＳＦ海外１位、星雲賞受賞

二〇五五年、アインシュタイン百周年記念会議が南太平洋に浮かぶ人工島ステートレスで開かれた。最終日には世界トップの理論物理学者三人が対立する内容の万物理論を発表するという。万物理論とは、宇宙の基礎をなす理法のすべてを要約するための数学的記述方法である。科学の僭越を批判し、万物理論にノーを唱える非科学カルト信者が多数参加し騒然とするなか、会議を取材するためにこの島にやって来た映像ジャーナリストのアンドルーは主流派ＡＣの一員を名乗る者から接触を受ける。彼の取材相手となる女性物理学者モサラを危害から守ってほしいというのだ。いったい彼女に何が起こるというのか？　かくしてアンドルーは万物理論をめぐる陰謀と戦いの渦に巻き込まれていく……。バイオテクノロジーの暴走、非科学との対立といった科学と現実社会をめぐる議論が続く前半も知的スリル満載で面白いが、ＡＣの正体があきらかとなり、謎の病気ディストレスと万物理論が絡んで驚愕の結末になだれ込む、後半の怒濤のような展開は圧倒的。イーガンの、いや現代ＳＦの代表作として必読の一冊だ。（〈ＳＦマガジン〉2011 年 10 月号）

『ディアスポラ』Diaspora(1997)

（2005 年 9 月 30 日発行／山岸真訳／ハヤカワ文庫ＳＦ）
★ベストＳＦ海外１位、星雲賞受賞

今年の海外ＳＦベスト１も昨年に引き続き、イーガンの作品が選ばれました。過去七年のうち、イーガンは何と 4 回ベスト１を制したことになります。12 年前「貸金庫」を読んで仰天し、ひたすらイーガンを読み続けてきたーファンとして素直に喜びたい偉業ですね。さて、イーガンの集大成であると同時にＳＦの集大成と言っても過言ではない大傑作『ディアスポラ』。ここでは本書をわかりやすく解説する講座を三つのレベルで進めていきます。まずは、レベル１。イーガンなんて知らないよ、またはこれから読んでみようかなという初心者向けに、基本的な設定と簡単なあらすじを紹介しておきましょう。

時は 30 世紀、既に人類は様々な形の変化を遂げています。たとえば、肉体を捨てて意識をソフトウェア化し、ポリスと名づけられたネットワークに住む市民たち。時間はスピードアップされ、彼らにとっては通常の 1 年が 800 年に当たります。彼らは現実世界なんてまどろっこしいだけで、地上に住み続けている肉体人はどうしてその非合理さに耐えられるのだろうと不思議に思っているわけですね。一方で、グレイズナーと呼ばれる人々は、意識をソフトウェア化しながらもロボット・ボディに入り込んで、外界との接触を重要視しています。ポリスへの移住が可能となってからは、ほとんどの肉体人が病気や老化のないポリスへと《移入》し、もはや地球には数ダースの都市居留地が残されているのみ。肉体人の中にも、改変をまったく認めない不変主義者から、人為的な遺伝子改変を行って水陸両生になったり翼を持ったりした改変態まで、様々な集団がおり、異質になってしまった集団同士は、架橋者と呼ばれる肉体人によって意思疎通できるようになっている――とまあ、こんなところが基本設定でしょうか。

確かにＳＦ慣れしていない人にとっては、現実からの飛躍が大きく、とっつきにくいかもしれません。しかし、一つ一つの要素を見ていけば決して難解ではないし、むしろＳＦの設定としては古典的とさえ言えます。人工知能の誕生、ソフトウェア化された意識、自らを遺伝子改変した人類、いずれも昔から多くのＳＦ作家が取り組んできた題材であり、80 年代にはギブスン、スターリングらサイバーパンク作家がこうした主題を好んで取り上げてきました。ただ、彼らがどちらかと言えばイメージ先行でこうした題材を捉えがちであったのに対して、イーガンは、より科学的な裏づけを重視しており、じっくりと主題を描きこんでいるためか、作品に哲学的な深みがあります。数学、物理学、情報理論に関する豊富な知識を駆使して論理を積み重ね、細部まで丁寧に書き込んだ描写は素晴らしいの一言。第一部冒頭、ポリス内で誕生した孤児ヤチマが意識を持つに至るまでの圧倒的な密度とリアリティはどうでしょう。描かれている内容は、強引にたとえてしまえば、生まれたての赤ちゃんが周りの大人たちに見守られながらカタコトを話し、自己を認識するようになるまでの出来事に過ぎないので、科学の苦手な人でも十分理解可能だと思います。いやオレは科学的にちゃんと理解したいんだという方は、レベル２を参照してください。《コニシ》ポリスの市民であるイノシロウ、ブランカ、ガブリエルと、やんちゃな振る舞いをする孤児ヤチマとのやりとりはユーモラスで、微笑ましいほどです。もしもここで読みにくいなあと思った場合は、本書の解説にもあるとおり、わからないところをどんどん飛ばして読み進んでいけばよいでしょう。優れた作品は様々なレベルで楽しむことができるものです。イーガン作品はどれもそうですが、科学的なレベルと情に訴えるヒューマン・ドラマのレベルとが実に巧く融合しています。情感の水をたたえた科学の器とでもたとえておきましょうか。器の素材や価値がわからなくても水を飲むことはできるし、器に美を感じたっていいんです。

さあ、第一部さえ乗り越えてしまえば、後はヤチマとともにひたすら前進あるのみ。頁をめくるたびに、壮大なスケールでめくるめく世界が広がっていきます。第二部では、百光年彼方にある中性子星連星が衝突して発するガンマ線バーストのせいで、いきなり地球が壊滅してしまいます。肉体人をポリスへ《移入》させて何とか救い出そうとするヤチマとイノシロウに対して、ソフトウェア化に激しく抵抗する肉体人。残された時間は四日間しかありません。ついに訪れる破滅の日。オーロラが広がり、稲妻が轟き、嵐が吹き荒れる風景描写の迫力は圧倒的です。イノシロウの苦悩、肉体人の悲惨な末路。地球規模に拡大された『日本沈没』といった感じで、個人的には、このパートが最も印象に残っています。第三部で、巨大な〈長炉〉を使ったワームホールの実験が失敗に終わった後（このあたりはレベル３を参照）、第四部で、ついに《ディアスポラ》計画が発動されます。ポリス市民のクローン千セットを千万立方光年の宇宙へ送り出し他の異生命体との接触を図ろうという遠大な計画です。三百年後、ついにヴェガ星系の惑星オルフェウスで生命の兆候が発見されます。惑星を取り巻く水の中には、果たしてどんな生命が存在するのか、こればかりは実際に読んでみてください。「想像できないものを想像する」（山田正紀）ＳＦの本質は、第四部の後半で遺憾なく発揮されています。十六次元の世界というイメージのあまりの強烈さに、頭がくらくらすること請け合いです。このパートは独立した中篇「ワンの絨毯」として発表され、日本でも高い評価を得ました。惑星を覆う海という設定からは、やはり異星生命体との接触を描いたレムの傑作『ソラリス』が連想されます。比較してみるのも一興でしょう。

第五部からは、もう一つの異星生命体トランスミューターを追跡する旅が始まります。結末に至るまで、旅は続けられ、長い長い時が流れます。ヤチマとパオロが旅の終点で見たものとは……。いくつもの宇宙を越えていく果しない旅。茫漠たる時の流れ。海外ではステープルドン作品にたとえられる本書ですが、日本ＳＦで言えば『果しなき流れの果に』と『百億の昼と千億の夜』を足して二で割ったような深い余韻が残ります。これが面白くないわけがありません。最後にもう一度、声を大にして繰り返しておきましょう。『ディアスポラ』は、イーガンの集大成であると同時にＳＦの、われわれが愛してやまないＳＦの集大成なのだ、と。（〈ＳＦが読みたい〉2006 年版）

『ひとりっ子』Singleton and Other Stories(2006)
（2006 年 12 月 15 日発行／山岸真編・訳／ハヤカワ文庫ＳＦ）
★日本オリジナル短篇集第三弾。ベストＳＦ海外３位

『ＴＡＰ』TAP and Other Stories(2008)
（2008 年 12 月 30 日発行／山岸真編・訳／河出書房新社）
★日本オリジナル短篇集第四弾。ベストＳＦ海外４位

『プランク・ダイヴ』The Plunck Dive and Other Stories(2011)
（2011 年 9 月 25 日発行／山岸真編・訳／ハヤカワ文庫ＳＦ）
★日本オリジナル短篇集第五弾。ベストＳＦ海外１位

『白熱光』Incandescence(2008)
（2013 年 12 月 15 日発行／山岸真訳／新☆ハヤカワ SF シリーズ））
★長篇。ベストＳＦ海外２位

『クロックワーク・ロケット』The Clockwork Rocket(2011)
（2015 年 12 月 25 日発行／山岸真・中村融訳／新☆ハヤカワ SF シリーズ）
★《直交》三部作第一弾。

次回予定

２０１６年４月２９日 or３０日　場所未定
作品『宇宙の戦士【新訳版】』ハヤカワ文庫 SF
名古屋ＳＦ読書会ＵＲＬ
http://www.ne.jp/asahi/science/fiction/dokusyokai/